

書評 近世新崎人傳漫言 : 中野三敏著『近世新崎人伝』

森, 銚三
近世文芸研究家

<https://doi.org/10.15017/16315>

出版情報 : 文献探究. 2, pp. 61-65, 1978-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

書評 中野三敏著『近世新崎人伝』

近世新崎人傳漫言

木林 銑三

中野三敏氏の新著近世新崎人傳の書名は、伴蒿陰の近世崎人傳正續二篇を聯想せしめる。書名は、多分蒿陰の書よりの命名なのであらう。しかし蒿陰の著は、

一の讀物として、趣味中心に書かれてゐる。中野さんのはさうではない。どこまでも力の籠つた研究書で、内容は「自墜落先生」以下五篇よりして成るので、篇数は少いが、どの篇も讀みごたへがあり、中野さんならではともいふべき一書となつてゐる。且に、敬意が表せられるし、特色もまたその点に存する。中野さんは、未だ研究らしい研究などの出来てゐない、そしてまた研究することの至つて困難な人物ばかりを選んて、一その根本資料を集め、それを縦横に駆使して本書を著されてゐるのであり、それだけに本書は力作でもあるし、労作でもある。人物研究の本筋を行つた著作として、推論に値するものとなつてゐる。その一人一人の事蹟を研究するに當つて、中野さんは少しも労苦を

惜しまれない。私としては、その点に第一に敬意を表せられる。本書の最初に置かれてゐる「自墜落先生」の一篇を執つて見よう。

自墜落先生こと山崎北華は、一部の人の多少はその名を知つてゐる人物で、往年中根春亭に師事した木村架空が、その人のことを書いた一文を、歴史地理誌上で讀んだことがある。しかしそれは單なる紹介程度を出ないものであつた。中野さんはその北華に就いての研究を進められ、文献を漁り、遺蹟を訪ひ、その著作を精讀し、自ら自墜落先生と名乗り、すね者としての一生を終へた、風変りの人物の一生を明らかにせられてゐる。

その研究を讀んで、私の驚喜したのは、中野さんが、花鳥確蓮坊などといふ、まだ何人も手を付けてゐない黄表紙の一作を資料として使つてゐられることだつた。その花鳥確蓮坊は、僅かに大東急文庫に一本が蔵せら

れてゐるに過ぎない稀親の書で、私なども勿論未見に屬するが、それが實に北華を主人公とした作品で、戯作者小傳に據れば、その書の作者は忍川春町であるといふ。それで中野さんは、大體その説に従つてゐられるのであるが、春町作の黄表紙には春町独特の特色の存するものがあるのに、中野さんの紹介せられたところでは、この作はまだ十分に黄表紙化せられてゐず、ユーモアにも乏しい。且つ引用してある文章も固くて、春町のものとは承認し難い。

そこで当てずっぽうをいふことを許していただくかねばならないが、この花鳥確蓮坊は、實は北華自ら作るところで、それを書肆に授けて版行せしめたのではなかつたか。私にはさう考へられるのであるが、いかゞであらうか。この一事に関しては、なほ中野さんの考處を煩はしたい。

北華の人物には、賣名的な氣分の存する一事がなつかしからぬが、花鳥確蓮坊にも、其角や、團十郎などの有名人を出して来て、主人公確蓮坊の人物を引立てることをしてゐる。北華といふは、さうしたことをしかなぬない人物だつたやうに、私には思はれて来るのである。

北華の自己宣傳家であつた一事には、多少ありがたからぬものを感じるが、北華には文學的才分があつた。

その著風俗文集に見るべき文の多いことは、既に中根香亭もこれを認めてゐるし、中野さんが引用せられてゐるものからも、そのことが確認せられる。私はこの点に北華を認めたいと思ふのであるが、いかゞであらうか。

北華自身は隱逸の士を以て任じてゐる。「其平生、只寝る事を業とす」といつてゐるのなど、快心の言とするに足る。しかしそれは文章の上での綾で、開業医者として生計を立て、ゐたらしいのであるから、そんなに寝てばかりもゐられなかつたものと見なければならぬまい。

医者としての北華は、「療治をうるさがり」などと自らいつてゐるのであるが、それもまた筆の上でのことで、實際は医業も相当に行はれ、さればこそ生前に今も残つてゐる養福寺の墓碑なども建てられたのであるまいか。北華その人を実際に知つてゐた人の記述してゐるものなどがあつて、医者としての北華先生は親切な、よい方だつたことなどとしてゐるものが見つかるなら、大いに嬉しいのであるが、さやうな文献はまた出て来ないやうである。しかしどこかにさやうなものもありはせぬだらうか。この一事には、なほ中野さんの留意を願つて置きたいと思ふ。

世をすねて一生を送つた人物として、中野さんは北

華を以て風来山人平賀源内に比してゐられる。それは動かぬところであらうが、個性の強さに於ては、源内の方が北華よりも一枚上にある。医者をしてゐた文学者として、北華を上方の上田秋成と並稱することが出来るのではないかと、私は思つて見た。医者としての秋成も、存外患者に親切だつたのではないかと、私は思つてゐるのであるが、そのことは北華の上にもいはれはすまいかと思はれる。たゞ秋成の膽大小心録のやうな、型破りの著作は北華にはない。北華も實際に逢つて見たら、案外穏かな、好人物だつたのではあるまいかと思はれる。

自ら自墜落先生と名乗つた山崎北華その人は、尊敬に値する人だつたとまではいはれぬかも知れないが、宝曆の江戸に、かやうな人物がゐて、自分の葬式を生前に出したり、墓を建てたりしてゐるなどといふのが、私には興味ある事実として映ずる。そして近頃は全く忘却せられた形になつてゐるその人を、中野さんが骨を折つて研究せられて、その面目を明らかにせられたのは、大いに嬉しいことだつたとせざるを得ぬ。

自墜落先生に、つい紙教を貰ひ過ぎた。中野さんは自墜落先生について、井上蘭台、俣山道人黙隱、金龍道人敬雄、沢田東江の四人を傳してゐられるのである

が、その四人の内では最後の沢田東江その人に、私は最も好感が寄せられる。この東江は、癖のない甚だ好ましい人物で、戦前その人に就いての一文を書いて見ようとしたこともあつたのであるが、手許の書留を調べて見ると、まだまだ資料が貧弱で、殊に中心となるべき特別のものを欠いてゐる。それで執筆を見合せてゐる内に、それらの資料も戦災に失ひ、今はどうすることも出来なくなつてしまつた。そんなこともあるだけに、中野さんがこの人を書いて下すつたといふことがありがたく、然も中野さんの記述は委細を盡してゐて、今さら私などの一事を附加すべきものもない。中野さんは東江を研究するに當つて、実に廣く資料を蒐集せられ、その上で執筆に當つてゐられる。その態度は実に慎重を極めて居り、少しの骨惜みせらるゝところもない。その一事にだけでも敬意が拂はれる。

たゞ一つ私の記憶に存するのは、松平定信の退閑雜記中の記事で、今は記憶に依つて書くのであるが、東江はその晩年に、自己の書風を一変せしめて、もつと力強いものたらしめたいと思つてゐたのであるが、それまでに書いて来た、いはゆる東江流の書が、あまりに世に行はれて、人々の喜ぶところとなつてゐるものだから、今さらそれを変改することをなしかねて、つひにそれなり一生を終つてしまつた。東江のいはゆる

東江流を離れて書いたものが、某氏の蔵するところとなつて居り、それはいはゆる東江の書蹟よりも、教段見事なものとなつてゐる。――

大體右のやうな内容ではなかつたかと思ふ。退閑雜記は活字にもなつてゐるものであるから、勿論中野さんも知つてゐられるのであらうが、東江にや、不利な資料として、引用するのを控へられたのかも知れない。しかし東江が、既に一つの完成を見てゐる自己の書に嫌はず、更に進境あらしめたいと願つてゐたといふは、東江その人を知るべきよい逸事だと思ふ。それでかやうな資料のことも、どこかに一言して置いて貰ひたかつたと思ふ。

吉原大全の一書は、果して東江の著作なのかどうか、多少の問題が存するのであるが、中野さんは幾つかの理由を挙げて、その著作たることを断ぜられた。いかにも中野さんのいはれる通りであらう。この書は数年前に木版の原本で一讀して、多大の感銘を得た。その著述の態度がまじめで、賣文家の一夜作りの著作とは、その面目を異にする。そして書物としての出来もい、どこかで原本のまま、を複製して貰はれまいかといふ希望すらも持たれる書物である。吉原などを扱つても、おのづから東江その人の感ぜられる書物となつてゐるのを喜びたい。

蘭台、黙隱、敬雄の研究には、つい觸れることをしなかつたが、それらも取り取りにすぐれた研究で、一つ一つが中野さんその人のものになつて居り、教へられるところの極めて多いことをいふに止めよう。

中野さんから、批評をするやうに命ぜられて、遽かにこの一文を草したのであるが、出来上つたものは全くの漫文で、書評の形を成さないものになつてしまつた。申訳のないことであるが、勘弁を願ふこととする。最後に今一度繰返させて貰ふこととする。傳記書類の刊行せられるものは多いが、それが既成の書の蒸返しだつたり、半ばは小説ともいふべき拵へ物だつたりしてゐるのに、うんざりさせられる。中野さんの新崎人傳は、それらの傳記と違を異にする。これはほんものの傳記である。中野さんは未開拓の原野に鎌を入れて、見事な成果を収めてゐられる。本書は世の傳記家の諸氏に對して、一の模範を示されたものともいへよう。中野さんの加繁自重を願ひたい気持が切である。

(昭和五十二年九月刊、二三〇頁、九八〇円、毎日新聞社)

(四二頁より続く)

- 1 山本信吉「新出の日本霊異記(来迎院本) についての」(説話文学研究10)
- 2 日本古典文学会刊・来迎院本『日本霊異記』複製に付された解題(山本信吉氏による)一・二・三頁参照。
- 3 遠藤嘉基「来迎院本『日本霊異記』の訓釈」(訓点語学会第36回研究発表会発表)・「来迎院本『日本霊異記』の訓釈について」(同第37回研究発表会発表)。
- 中田祝夫『日本霊異記』(小学館日本古典文学全集所収)。
- 4 八木毅『日本霊異記の研究』。
来迎院本は、昭和五十二年三月二十八日、国室に指定され、保存措置として、特に必要な場合以外閲覧を許可しない方針が取られているようである。
- 5 古典資料6『日本霊異記』(すみや書房刊)、およびその解題(小泉道氏による)参照。
- 6 築島裕『平安時代語新論』二一八頁(「變體漢文」の項)参照。もっとも、「この部分は四字一句の佛典の語法などの影響音が著しいところだ」というようなことを言われているわけではない。あくまで、参考として示すもの

- 7 中村宗彦「霊異記雑考」(訓点語と訓点資料35)。
迫野虔徳「日本霊異記下巻序の本文と訓釈」(同43)。
八木毅『日本霊異記の研究』二〇頁〜二七頁。
そのほか、
- 8 秋吉望君は、近々この問題につき論考をまとめる予定と聞く。参照されたい。
- 9 下巻序「翻字ニ丁表六行目「候モラフ」。諸本の訓釈同様。これについては、モル↓モラフ↓サモラフと発展する語史の中間に位置するものと考えられている。『新撰字鏡』(天治本)巻四に「餽餽寄食也如由又阿佐利波牟又毛良比波牟」と有る。おそらく「毛良比波牟」は「寄食」で、『霊異記』の例を補強し得るものであろう。

※なお、本稿は、前記九州大学大学院演習によって得た成果とさせて頂く。その意味で、指導に当られた春日先生の御学恩に対し、本稿を以て感謝の念を表すことかてまれば、筆者の幸、これに過ぎるものは無い。